

「刑務所の方がましだ」

——イラク戦争脱走米兵は訴える——

本野 義雄

イラク戦争開始から2年、その前のアフガニスタン戦争から数えて3年半。米軍兵士の戦死者は千五百人を越え、連日のストレスに晒されてきた米兵の中から、この大義なき戦争への疑問や抗議を行動で表わす者が増え始めている。以下、インターネットを利用して得た情報を紹介したい。

5～6千人が脱走

「ポスト・デスパッチ」紙のフィリップ・オコナー記者によれば、米軍当局はこの戦争での脱走兵の数を5千から6千人の間と推定する。これは30日以上AWOL（無許可離隊）を続けた者を含めた数字で、その大部分は所属部隊に戻り、懲罰を受けているという。

CO（良心的兵役拒否者）の資格申請者は、02年の31人に対し03年は92人と3倍に増え、うち77人が申請を認められた。

一方、「兵士の権利ホットライン」グループによれば、兵士たちからかかってくる相談の電話は、01年の1万7千件に比べ、03年は3万2千件に達した。その多くは、軍が雇用時に約束した条件を守らないこと、州兵なのにイラクへ派遣されること、派遣期限の一方的

延長等への不満を内容としている。電話をかけて来た兵士の約15%が、支持できない戦争に加わるためにイラクに行くつもりはない、と述べている。

3月4日の朝日新聞夕刊によると、今年2月の米陸軍志願者数は求人目標の七〇五〇人に対し五一一人にとどまり、27・5%の不足となった。予備役や州兵などの志願者数も求人数を下回っているという。志願者不足は兵士たちの派遣期限の延長、勤務の過重化を招き、彼らの不満を募らせるだろう。

メヒア見習曹長の場合

フロリダ州マイアミビーチ出身のカミロ・メヒアア州軍見習曹長（28）は脱走の罪で起訴され、04年5月、軍事裁判で禁錮1年と非行除隊を申し渡された。

メヒアアは陪審員に語った。「私が決心した動機のひとつは、ラマデイで出会った待ち伏せ攻撃だった。4人の兵士が榴弾で負傷し、1人のイラク民間人が米軍のマシンガンでバラバラにされた。その時から物事が変わり、感覚が変わった。人間の生命についての見方が一変したんだ」。



カミロ・メヒアア

別の時期、メヒアアの部隊はアル・アサド拘留者収容所を管轄していた。そこでは情報校たちが、抵抗戦士の容疑者たちに心理的拷問を加え

メヒアア見習曹長は米軍のイラク侵攻直後の5カ月間いわゆるスンニ三角地帯で戦闘に参加、彼の言葉によれば「人びとを殺し、自分も殺されかけた」。不幸なことに、彼の上官たちは「戦闘名誉勲章に飢え、部下の安全を顧みない」タイプだった。120人の彼の中隊は4小隊に分けられ、ラマデイという治安の極めて悪い町の要衝を数日間占領するよう命じられた。これは作戦行動基準に反していた。彼らは1カ所に駐留するのではなく、絶えず移動するよう訓練されていたからだ。全員が極度に緊張した。そして部隊は攻撃を受け、複数の負傷者を出した。

部隊がそれまでと全く同じ戦術をとるよう命じられた時、メヒアアは拒否した。「私は彼らに言った、俺はもうやめた」と。彼にとつて幸運なことに、負傷者を出した部隊の4人の見習軍曹も出動を拒否した。戦場での命令拒否は反乱と見なされかねなかったが、軍曹たちは司令官と膝づめ談判して、兵士たちのパトロールのタイミングと行動範囲を変更する新しい作戦計画を認めさせた。メヒアアもこれに同意した。しかし軍当局は、「メヒアアは敵と遭遇した時も全く戦意を示さなかった」と主張する。

るよう兵士たちに命令した。フードをかぶせられ、縛られた四人たちは、処刑するぞと脅され、1日中眠らないよう強制された。「われわれはある男を失神させた。彼を金属製の小さなクローゼットに閉じ込め、5分おきに外側をハンマーで叩いた」。

彼の証言から、イラク戦争の様々な真相が見えてくる。検問所の前で走って射殺された市民。デモ参加者を射殺した兵士。戦闘に突入できるよう命令を改ざんした将校。戦場から離脱するために、自分の踝を撃ちぬいた将校。自分の娘が強姦されているのに、止めに入ることも許されなかったイラク人の父親。頭部に榴弾を受け、言葉を話すことも出来ないが、夜中に起き上がってすすり泣く兵士。

メヒアはさらにつけ加えた。「誤って子供を殺すぐらいなら、5年でも10年でも刑務所に入った方がましだ。戦場では、周りに民間人がいようとまいと、撃たれたら撃ち返すんだ。刑務所はいつか終るけど、子供を殺したら一生立ち直れないからね」。

ウェブ看護兵の場合

カール・ウェブ看護兵(39)は軍を退役して7年後の01年、テキサス州兵となった。3年の契約があと2カ月足らずで終るという去年7月、軍は突然あと255日の連続勤務を命じた。しかも彼の部隊はイラクに派遣されるというのである。8月に訓練のためフド基地に出頭するよう連絡を受けたが、彼は行か

なかった。今年1月、部隊はイラクに出動したが、やはり行かなかった。

「行かないという決意は揺るがなかった。

ぼくは最初からこの戦争に反対だったから。離婚して独り身の彼は、メキシコのカナダに逃げることも考えたが、年老いた母親と会えなくなることは耐えられなかった。彼から相談を受けた反戦グループは、軍が公式に彼を脱走兵と認定するまで待つて、それから出頭し、軍事裁判で除隊を求めることを勧めた。しかし、軍は何の連絡もよこさず、ウェブは法的に宙ぶらりんの状態におかれている。彼は自分が卑怯者だとは思っていない。

「俺は平和主義者じゃない。戦争で戦うこともあるだろう。だけど、自分が間違っただけに思っただら殺せないよ。これは石油と利潤のための戦争であって、皆に民主主義をもたらすための戦争なんかじゃない。俺は正しい大義のために戦って死にたいんだ」。

ベンダーマン技術兵の場合

ブラッドリー戦車の技術兵として9年間勤務したケヴィン・ベンダーマン(40)は、03年に6カ月間イラクに派遣されたが、04年12月28日、彼の部隊が再度イラクに出動する10日前に、CO資格を申請し出動を拒否した。

軍は今年1月、彼を軍法第85条及び87条違反——困難な任務を回避するための脱走と、所属部隊出動への不参加のことで起訴する方針を明らかにした。軍事裁判の日取りは未定

だが、もし有罪になれば、最高で懲役7年、二等兵への降格、不名誉除隊の処分を受ける可能性がある。

ベンダーマンは「ソーシャル・ワーカー」紙の記者にこう語った。「私にこういう決意をさせた最大の出来事は、ある日、腕から背中にかけて大やけどを負った少女が道端に立っているのを見たことだ。重度3のやけどで、彼女の腕の一部は黒こげになっていた。集団埋葬地の墓穴を見たことがある。そこには、老人や、女性や、子供たちの遺体が折り重なっていた」。「どうしてわれわれ人類は、罪のない子供たちにこのような苦しみを与えるのではなく、もう少しましなやり方で意見の相違を解決することを考えようと思わないのか」。「私はただ、こうした罪のない人びとがどうして米国憲法への脅威になり得るのか、理解できないだけだ」。

ベンダーマンはブッシュ大統領への手紙の中でこう書いている。「もし貴方が軍と軍に勤務する人びとに本当に敬意を払っているのであれば、自らの戦争で彼らの生命を奪い続けることはしないでしょう。……私は、内外



ベンダーマン夫妻

の敵から祖国を守るという軍との契約を果たしたいと思えます。私にとって、合衆国の国内の敵とは、貴方なのです」。

ベンダーマンが所属するジョージア州スチュワート

基地の2-7歩兵大隊では、彼のほかに数人の兵士がイラクへの出動を拒否、軍事裁判にかけられることを求めている。また同大隊の特技兵J・R・バートとデイヴィッド・ピールズは、出動直前の1月上旬、手首を切って自殺を図りウイン陸軍病院の精神病棟に収容された。複数の匿名の証言によれば、ピールズの自殺未遂の原因は、同じ部隊の軍曹から「イラクに行ったらお前が殺されるようにしてやる」と脅されたからだという。

パレデス下士官の場合

去年12月6日、パプロ・パレデス3等下士官は、ペルシア湾に向かう彼の船をサン・デイエゴ軍港のデッキから見送った。あと20カ月で6年の海軍での兵役を終える彼は、CO資格を申請、イラクへの乗船を拒否したのだ。「自分が支持しない戦争のために6カ月汚い仕事をするくらいなら、軍の刑務所に入った方がましだ」と、彼は記者に語った。海軍は彼を脱走者と見なし、処罰を考慮中だという。「われわれの努力が、民間人、いろいろな組織や学生をはじめとする人たちに影響を与えてほしい。この暴力と残虐に満ちた戦争を止めるために声を挙げる必要があるんだ」と、パレデスは訴えている。

ヒンズマン二等兵の場合

2度にわたってCO申請を却下されたジェ

レミー・ヒンズマン二等兵(26)は、イラク派遣が迫った03年12月、所属するノースキャロライナ州ブラッグ基地を離れ、ヴェトナム人の妻と10歳の息子とともに車で国境を越え、カナダ移民亡命局に保護を求めた。

ヒンズマンと彼の弁護士ジェフリー・ハウスは、カナダ政府には彼に亡命者の資格を与える義務がある、と主張した。なぜなら、もし合州国に帰されたら、彼は不法な戦争に参加するのを拒否したという理由で起訴されるからである。「この戦争は国際法に照らして違法だ。挑発もないのに始められ、国際社会に非難されてきた。ブッシュ政権は、サダム・フセイン体制が大量破壊兵器を持っているとか、アル・カイダと関係があると嘘をついた」と、ヒンズマンは言っている。

しかしカナダ政府は今年2月になって「米国のイラク侵攻と占領が合法であるかどうか」という論議は、移民亡命局が判断できる範囲を超えている」との見解を発表した。「戦争の合法性を論じる権威と能力があるのは、ハーグの国際司法裁判所だけだろう」と、カナダ政府高官は述べた。

ハウス弁護士は「カナダ政府がそのつもりなら、国際法廷の決定を待つ用意がある」と言ったが、カナダ政府の意図は適当な法律機関を探すことではなく、論議そのものを避けることにある。カナダの自由党政権はイラクへの軍隊の直接派遣こそ見合わせたものの、米英のイラク侵攻と占領を全面的に支持、兵

站の上でも重要な支援を行なっている。

30数年前のヴェトナム戦争時、カナダには何万人もの脱走兵や徴兵忌避者が米国から殺到し、当時の反戦世論に押されたカナダ政府は、彼らに居住権を与えざるを得なかった。マーティン自由党政権や上層部が恐れているのは、そうした事態の再現である。事実、ハウス弁護士のもとには、イラク侵攻開始以来100〜120人の兵士がカナダへの亡命を求めて相談に来ており、全世界から毎日問い合わせのEメールが届くという。「もしわれわれが成功すれば、同じことをやろうと思っている皆にドアを開くことになるんだ」と、ヒンズマンは言う。

彼はクエーカー教徒の友人の好意で、家族と共にトロントの小さなアパートに暮らしている。貯金は尽きかけ、労働許可を申請した。彼を支援する運動は全カナダに広がり、世界各国から激励の手紙が届いている。その一つは女優スーザン・サランドンからのものだった。最近、ある有名な音楽家は、匿名で彼の訴訟費用を負担すると申し出たという。

=====

出所「Not In Our Name」[Veterans for Common Sense]「MSNBC.com」
「Socialist

Worker online」[Common Dreams News Center]「World Socialist Web Site」

(もとの・よしお、元『脱走兵通信』編集部、市民の意見30の会・東京会員)